「たけくらべ」の擬態

――裏声で歌われた戦争小説――

浅野　洋

はじめに

「たけくらべ」は、後述するように日清戦争のさなかに起稿され、物語の時間と戦時が合致し、作者一葉も戦争の行方を注視していた。だから、「たけくらべ」には〈戦争〉の影があって当然なのだが、その観点を軸に作品全体を見通す論考を寡聞にして知らない。たとえば前田愛の「子どもたちの時間」(注1)は、明治の期待される少年像として「立身出世を夢見て刻苦奮闘」し「国家有為の人材」となる「勤倹力行の少年像」とは逆に、「たけくらべ」の「子ども」たちが「アソビの相」で描かれていることに注目する。特に「遊戯者として の子ども」の象徴である美登利の初潮に「大鳥大明神にささげられたいけにえの証し」すなわち吉原で娼婦となる「美登利に負わされた性と金銭の穢れや罪障」を見出だす。前田氏は、その「遊び女に再生するため」の「少女」の「死」を「子どもたちの時間」の「終わり」とし、吉原周辺に迫る都市化の波とともに大音寺前の「子どもの世界」を消滅させた「見えない力」を「近代」だと結論づけた。明治政府が奨励した立身出世による「近代」化とはむろん「富国強兵」の謂だが、前田論の「近代」には金銭の論理を強いる「富国」への道筋はうかがえても、もう一方の「強兵」やその末

路である〈戦争〉への通路が見えない。数ある「たけくらべ」論においても事情は同様なのだ。

そうしたなか、小森陽一[注2]は「たけくらべ」に日清戦争前後の日本社会の「格差」を見る。格差は「近代の学校教育の病」にも及ぶが、特に「検査場」の場面に「近代国民軍」の「大きなかなめ」である「兵士の性的欲望を満足させる装置を軍隊と売春制度を一緒に構築」する「論理」が集約されるとし、一葉はその格差を「売買春の問題をとおして描きだそうとした」とする。小森氏はレイプや売買春が〈戦争〉と「密接不可分に結びつ」き、売買春は「お金を介在させて女性の〈言葉〉を奪う」行為であり、それが「最も強化される」のが戦時であって、「たけくらべ」は「子どもたちの世界をとおして、国家が管理する売春の現場である吉原」で「人間が人間でないものにさせられていくプロセスを描いた」物語だと論じた。たしかに〈戦争〉の影は「検査場」にも落ちているが、そうした一部に限らず、日清戦争は「たけくらべ」全体に深く刻みこまれているのではなかろうか。それはいわば日清戦争を丸ごと内蔵するきわめて特異な〈戦争小説〉なのである。以下、その点に焦点を絞って一編を読み直してみたい。

一

「たけくらべ」の冒頭（一）は、「廓内（なか）」に隣接する「大音寺前」の「よそと変」わった「風俗」や生活ぶりなど、物語世界を包みこむ〈空気〉から語り出される。ただし、物語の展開は「八月廿日」の「千束神社のまつり」を二日後にひかえた「十八日」の夕暮れ近く（二）に始まり、十一月末の「三の酉」が終わって「表町は俄に火の消えしやう淋しく成」った後の「或る霜の朝」（十六）で幕を閉じる。

作品内の時間については、早く青木一男[注3]が一葉の下谷竜泉寺在住当時の日記と作品内容との類似などから「明治二十六年の（夏から秋へかけての）物語」とする。もっとも、当年（明26）の酉の市は「二の酉」までで、それもきわめて印象的だったために「塵中日記」（明26・11・20）に「二の酉のにぎはひは此近年おぼえぬ景気といへり　熊手かねもち大がしらをはじめ延喜

〔縁起〕物うる家の大方うれ切れにならざるもなく十二時過る頃には出店さへ少く成ぬとぞ　廓内のにぎはひをしてしるべし」と記されている。しかし、作中の描写は「二の酉」ではなく「此年、三の酉まで有りて」（十四）の様子なのだ。和田芳恵[注4]によれば「明治二六年の秋には『三の酉』がなく、本郷丸山福山町へ引越した翌二七年が三の酉まであった」。つまり、物語の時間は、竜泉寺在住時（明26・7～明27・5）ではなく、また執筆時（明28・1～明29・1）でもなく、なぜか作品発表の前年、明治二十七年の八月から十一月末頃の設定である。[注5] この微妙な時間設定にはどのような意味があるのか。たとえば、「たけくらべ」発表当時の読者の脳裏には、発表時からみて五カ月前の千束神社の祭や約一年前の三の酉の賑わいとともに、千束神社大祭の直前に戦端を開いた日清戦争の高揚や余燼も想起されたはずで、そのことが物語の時間設定と深くかかわっているように思われる。

問題をみやすくするため、以下に関連事項の時間を整理した表を掲げる。

竜泉寺町在住期間	明26・7～明27・5
作品発表時	明28・1（一～三）／明28・3（七～八）
素材	明27・8（千束神社の祭）／明27・11（三の酉）
（物語の時間）	（明27・8～明27・11）
日清戦争	明27・8（7）～明27・11（28・4）

日清戦争は、明治二十七年七月二十五日の豊島付近における清国軍艦との交戦や、同二十九日の陸軍による成歓や牙山への攻撃で火ぶたを切り、八月一日には「宣戦の詔勅」が発布された。九月十六日の平壌攻撃や十七日の黄海海戦などで戦火はしだいに激しさを増してゆくが、同年十一月二十二日の旅順口占領によって戦況の大勢はほぼ決した。現に、十二月九日には「東京市第一回戦捷祝賀大会」が開催されている。

開戦以来我軍向ふ所敵なく鳳凰、九連、秀巌、皆すでに我軍の占領する所となり、海上にも亦黄

海の大捷ありて敵艦殆ど戦闘力を失ひ、纔かに威海衛に余命を繋ぐ、此時此際清国が渤海の鎖鑰と恃み切つたる旅順口も難なく我掌中に帰し、こゝに戦争の一段落を告げたるの有様となりぬ。（傍点筆者、「時事新報」明27・12・11）

同記事は「祝捷大会」の様子を「定刻より日比谷或は上野公園に参集するもの先を争ひ非常の盛會を見ることを得た」と報じ、続いて「市中の賑ひ」を次のように伝える。

市中は戸を開くると共に国旗或は聯隊旗を軒頭に掲げ、中には球燈を吊したる町もありし。鉄道馬車は申すに及ばず、ガタ馬車に至るまで国旗を朝風に翻し、人力車夫の中には小旗を母衣（ほろ）に掲げて客を引くもあり、銀座、日本橋、浅草、神田、下谷等の大通りは云ふも更らなり、山の手の町々悉く紅を以て飾られたりと云ふも不可なく実に一大美観なりし。行列の道筋に当らざる街路も人足何んとなく繁く、職人等は概ね業を休み問屋向の家々にては丁稚小僧に外出を許し、婦女小児は神田三王祭典の如き思をなし、晴衣をまとひて、会場に赴かずとも近隣を遊び歩くあり、夫れや此れやのためにて全市の賑ひ一方ならず（以下略）

「たけくらべ」には戦勝祝賀の「賑ひ」がうかがえないが、実際には吉原に近い「浅草」や「下谷」でも戦勝を祝う歓声が渦巻き、市中には「国旗」や「聯隊旗」がはためき、女子や子供はお祭気分の「晴衣」姿で遊び歩いている。こうした戦勝気分の歓呼の波が吉原や大音寺前にだけ及ばなかったとは考えられない。だが、一見したところ、「たけくらべ」の世界には〈戦争〉の影は皆無なのだ。それはなぜなのか。

二

上掲の表にあるように、宣戦布告から戦況の大勢が決する日清戦争の時間と物語の時間はほぼ合致する。「たけくらべ」の起稿（明治27年12月末頃）は開戦から約五カ月後の戦時中、戦争終結（明28・4）直前には第三次分（七～八）が発表される。つまり、「たけくらべ」の前半は日清戦争を横目に執筆され、後半はその

余燼が尾をひくなかで執筆されている。戦争自体は、明治二十八年四月十七日の日清講和条約締結で終結の形となるが、三国干渉への反発などでその後も余波は続く。一葉は〈天下国家〉を憂い、一国の運命を左右する戦争にも注目した。そのことは日記を一読すれば明らかで「塵中につ記」（明27・3）冒頭にはよく知られた「思ひたつこと」が次のように記されている。(注6)

朝野の人士、私利をこれ事として国是の道を講ずるものなく、世はいかさまにならんとすらん　かひなき女子の何事を思ひ立たりと及ぶまじきをしれどわれは一日の安きをむさぼりて百世の憂を念とせざるものならず（中略）死生いとはず天地の法にしたがひて働かんとする時大丈夫も愚人も男も女も何のけぢめか有るべき（中略）わが心はすでに天地とひとつに成ぬ　わがこゝろざしは国家の大本にあり

こうした天下国家への憂いとともに戦争もまた重大な関心事だった。事実、「につ記」には「朝鮮東学党ます〳〵勢力を加へけるよし　露国人の加ハり居るやに風説すれバ同国政府の恐こう少なからぬよしに聞く」（明26・6・26）や「朝鮮東学党しづまりてハ又もえあがるよ」（同6・7）として朝鮮半島の不穏な空気に注目し、翌年の「水の上日記」（明27・7・22）には「朝戦〔鮮〕開戦の期漸く近づきぬ」と日清開戦の動向に注目している。後者は「戦機迫り　――我兵牙山に向ふ」といった前日の記事（「東京朝日新聞」明27・7・21）などを目にしてのことだろう。また、翌年の「水の上日記」（明28・4・16）には「よ〔夜〕に入て号外来る　平和談判と、のへり　委細ハあとよりとあり」と記し、続報の遅さに苛立ってか「いまだ談判の後報来らず」（同17日）とも述べる。三月には講和の方針決定と講和使節李鴻章の来日が報道されるが、小山六之助の狙撃事件で延期となり、交渉は四月十日に始まり十七日に条約調印となった。後日の「水の上」（明28・5・30）には次のような記事もある。

主上東都に還幸　即ち凱旋の当日なれば戸々国旗を出し軒提燈など場末の賤がふせやまでいたりてうらや住居するものは手遊やにうる五厘国旗など

さしたるもミゆ　着輦は午後二時成りといふ

要するに、一葉の日清戦争に対する関心はその終結に至るまで衰えていない。ところが、日清戦争の記事自体となると意外に少ない。小森氏も「日清戦争に関する記述」が「ほとんど出て」こないのは「不思議」で「異様」だと述べる。ただし、戦時の日記自体に欠が多く、また、講和条約の内容が一葉の「期待した平和とは全く異なったもの」と感じたので関連記事の「削除を思い立ったのでは」という野口磧[注7]の推測もある。だが、記事の分量は少なくとも、上記だけでも一葉の〈戦争〉に対する関心の強さは明白だろう。となると、「たけくらべ」に〈戦争〉の影が見えないのは、むしろ事態の本質を冷徹に凝視する一葉が意図的に選んだ〈方法〉だったとも考えられる。

三

戦時下の日記の欠を補い、戦争に対する一葉の感懐が吐露されるのは、長くなじんだ歌の世界だった。野口氏[注8]が「日清戦争が日本軍の圧倒的な勝利に傾いていた時期に、夏子がどのような印象を以て戦争を感じていたかをうかがう貴重な資料」とした「詠草　42」（明28・1～2）の連作四首（整理番号5～8）と、もう一首の歌（整理番号23）である。「戦争の悲惨さや死を思う憂鬱に焦点」を置くとされる歌五首を見直してみたい。

まず、連作の第一首目は「としのはじめ／戦地にある人を／おもひて」との詞書きで、戦地の悲惨に思いを馳せた新年の歌である。

おく露の消えをあらそふ人も有を／いはゝんものかあら玉のとし

趣意は〈先を争うようにはかなく命を落とす人々もあるというのにどうして素直に新年を祝えようか〉というものだろう。新年のめでたさを寿ぐ世間の気分を離れて、遠い戦地で命を落とす人々のことを思いやる一葉の心は重く沈んでいる。

続く二首目の詞書きは「敵国のさまをさぐりにとて立出し人のはかなき終りをとげたるも多しときくにそれが妻などのこゝろハとて」というもので、敵情視察

のために「間諜」として赴く人々の中にはむなしく外地の土となる人々も多いと聞くが、その妻たちの心情はいかばかりか、と一葉は思いやる。事実、当時の新聞紙上（「時事新報」明27・10・13）には次のような記事も見える。

先頃上海に於て日本の間諜なりとの嫌疑を受け、支那官吏に捕へられ、すでに南京に護送されて、或は殺さるゝならんとの風説ありし福原、楠内の二氏は、今尚ほ無事なるのみならず、北支那日々新聞によれば遠からぬ内放免さるゝものゝ如し（以下略）

実際にはこれと逆の不幸な結末が多かったろう。スパイという役目柄その武勲は人目に立たず、どことも知れぬ地で落命するのだ。その彼らにも銃後の妻たちはいるのであり、その女たちの心情を思うと一葉の胸はひときわ痛む。そして、次のような歌が詠まれる。

さだめたる方こそあらめ旅衣／身さへたたれんものとやハミし

趣意は〈赴く先もいつまでの滞在ともわからぬ旅の身とはいえ、命まで断つことになるとは思ってもみなかったろう〉というものだろう。また、この歌と〈対〉になるべく「さりながらそれもまた」の詞書きを付して三首目の歌が続く。

うら山しいづれ消ゆべき露のよを／野原のあらし立まさりつゝ

趣意は〈浦山で（恨めしくも）命がはかなく消えるのは世の常だが、さらに急かせるように野原の嵐（戦争）が吹き荒れることだ〉というほどの意味だろうか。

四首目の詞書きは「さむきふすまかすけきともし火しづかにあほひで故郷をしのぶときいミじきつはものといへども涙ハ襟の冷か成べし」とやや長い。冷たいすきま風の吹き込む兵舎でかすかな灯火を静かに見つめながら故郷をしのぶとき、屈強な兵士たちといえども涙で襟を濡らすこともあろう。そうした想像をめぐらしながら一葉は次の歌を詠む。

つるぎ太刀冴ゆる霜夜の月に寝て／結ばぬ夢のゆくゑをぞおもふ

いささかおぼつかないが〈軍刀が冷たく光るような細

い月が冴える底冷えの霜夜に床につけば、故郷に帰るという実現しがたい夢がいつ叶うのかと悩ましい〉というほどの趣意であろうか。その詞書きからして、一葉は戦地にある兵士たちの〈望郷の念〉に深く同情し、その哀しみに寄り添おうとしている。

次に、上掲の連作四首からやや離れた整理番号「23」の歌を見ておこう。詞書きは「丁汝昌が自殺はかたきなれどもいと哀也さばかりの豪傑をうしなひけんと思ふにうとましきはたゝかひ也」である。清国北洋艦隊の提督だった丁汝昌は、生き残った兵士たちの身の安全を交換条件に投降し、劉公島で捕虜となっていたが、明治二十八年二月十五日、敗軍の将たる責任から服毒自殺をした。新聞は「十七日大本営発」として「北洋艦隊提督丁汝昌自殺す／悲壮の最後＝全清軍の汚辱を雪がんとす」とその死を伝えている（「東京日日新聞」明28・2・18）。一葉もこうした自殺の報に接したのだろう。敵国の将とはいえ、その責をまっとうしていさぎよく自殺した豪傑を哀れに思い、その命を奪ってしまう〈戦争〉の残酷さをうとましく思うといった詞書きを添え、次の歌を詠んでいる。

中垣のとなりの花の散るミても／つらきは春のあらし成けり

趣意は〈双方の間に垣根（国境）のある隣家（隣国）の花（豪傑）が散る（死ぬ）のを見てさえ心が痛むのは春の嵐（戦争）のせいだ〉であろう。一葉の戦争に対する嫌悪は詞書きの「うとましきはたゝかひ也」や歌中の「つらき」や「あらし」の語に端的だろう。敵も味方もなく有名無名もなく、戦地に消えたすべての命にその眼は注がれる。(注9)

こうした詠草をみると、一葉の視線は、〈戦争〉を主導する国家や国益や軍隊にではなく、その犠牲となる死者たちにもっぱら注がれている。その多くは、否応なく駆り出されて落命する下級兵士、すなわち無名の庶民だろう。さらに、一葉のまなざしを特徴づけるのは、兵士だけではなく、銃後で心を痛め、夫の無事を祈り、夫が死傷すればさらに辛苦を背負いこむ妻たちの身にも注がれている点だ。戦争の犠牲者は、第一に消耗品の如く落命する無名の兵士（庶民）たちだが、

戦地には立たなくとも背後（銃後）で身を削る思いで夫や息子の無事を祈る妻や母たちの苦悩もまた「たたかひ」の渦中にある。二首目の詞書き「それが妻などのこゝろハとて」と思いやる一葉の脳裏には、実は女たちこそ〈戦争〉の最大の犠牲者ではないか、との思いはなかったろうか。一葉が「たけくらべ」の世界に戦時の高揚感や戦勝気分の賑わいを（少なくとも表面的に）持ちこまないのは、「うとましき」戦争による犠牲者たちの「つらき」思いが軽々しいものではなく、その思いを深く心に刻むがゆえの慎重さであったろう。なかでも、戦地に立たず、死傷する危険もないため顕在化しにくい〈女たちの戦争〉の悲哀を、そのまま描けば感傷的になりやすく、時局からすれば厭戦気分を煽る作とも見られかねない。「たけくらべ」における日清戦争の不在は、そうした困難と対峙しつつ、〈戦争〉の深い傷をより精妙に表現するための戦略だったのであろう。一葉のとった戦略とは、たぶん、語らずに語ること、すなわち〈裏声〉で歌うことだったのではあるまいか。

四

くり返せば「たけくらべ」には直接的な〈戦争〉の影はたしかに薄い。しかし、作品世界を裏打ちする現実の吉原遊郭や大音寺前は〈戦争〉や〈戦勝気分〉の高揚に包まれていたはずである。その一端は、開戦後まもなく「戦争人気」として「絵双紙店の前／掏摸（すり）の被害多し」を伝える次のような記事からもうかがえる。

昨今絵双紙屋には日清戦争の錦絵が並べあるより、何れの店頭も見物人山の如く或は口をアーンと開き、或は伸あがりして気を取られて居るをつけこみて、例の掏摸共が仕事をするは此時なりとて、出掛けること非常にて、時計、煙草入、懐中物を取られる者多しと云ふ（「都新聞」明27・8・18）

スリの横行は別として、「日清戦争の錦絵」を並べた店頭に見物人が「山の如く」押し寄せた事実は、当時の市民たちの熱狂ぶりを端的に物語っている。

一方、「たけくらべ」の世界はどうであったか。たとえば、表町の子供たちの溜まり場「筆や」は、美登利が買い占めた「手遊」や「ごむ鞠」（三）をはじめ、

「智恵の板」や「十六武蔵」（五）、また「細螺（きしやご）」（十）などの遊び道具を扱う。信如が「筆か何か買ひに来た」らしい場面（十一）や「筆や」の屋号からすると、本来は文具一式を主に扱う店だったと思えるが、実態は子供たちを相手とする雑貨屋であろう。その軒先には「掛提燈」や「吊りらんぷ」は見える（五）が、「国旗」や「聯隊旗」や「日清戦争の錦絵」など、〈戦時〉を思わせる品はいっさい描かれない。子供相手の雑貨店ならば、時局柄、安価な子供向けの戦争錦絵や国旗などもあってよいはずだが、それが見えない。長吉から恥辱をうけた美登利を慰めるために正太が持ち出した錦絵は、「日清戦争の錦絵」ではなく「古くより持つたへし」錦絵だった（六）。つまり、作中の子供たちを取り巻く世界はたしかに「アソビの相のもと」にある（前田氏）が、注目すべきは、そのアソビの世界にも〈戦争〉の影が及ぶ可能性が高いにもかかわらず、それが見事に排除されているという事実だ。この子供たちは「立身出世を夢想する」「勤倹力行型」のモデルから遠ざけられている以上に、身近な〈戦争〉の熱狂から遠ざけられ、戦争などまるでないかのような別世界を生きている。その意味ではくり返し述べるように「たけくらべ」には〈戦争〉をめぐる直接的な描写はないが、実はそれを連想させる場面はある。

たとえば、美登利の姉大巻の常連客について語られる次のような一節である。

我が姉さま三年の馴染に銀行の川様、兜町の米様もあり、議員の短小（ちひ）さま根曳（ねびき）して奥さまにと仰せられしを、心意気気に入らねば姉さま嫌ひてお受けはせざりしが、彼の方とても世には名高きお人と遣手衆の言はれし（七）

まず「兜町の米様」である。開戦前の世情不安や軍事公債の発行などで暴落した株は、まもなく「兜町に生色あり」として「戦捷景気出現」が報じられ（「時事新報」明27・8・21）、その後も乱高下をくり返す。そうしたなかで「兜町の米様」は、その名前からして戦時の米相場で儲けた戦争成り金だった可能性が高い。[注10] 事実、開戦三カ月前には米が買い占められ、「深川に米の洪水／在荷百万石」といった新聞報道も見える。

東京の在米は先日来一百万石と称せしが、昨今益々加はりて百十万石は慥にあるよしにて、其証拠には深川の倉庫は何れも将に溢れん計りの有様にて、最早東京には廻米あるも其入れ所なかるべしとなり（明27・5・3「国民新聞」）

七月には大阪堂島でも大がかりな買い占めが始まり、米価は短期で急騰、戦端が開くとさらに高騰し、ここで売り抜けた相場師らは巨万の富を得たはずで、「兜町の米様」もそうした一人ではなかったか。日々の生活を借金でやりくりする樋口家にとって、米価の高騰は最もこたえる災厄で、そうした戦争の影響に一葉はとくに敏感だったろう。

「銀行」は、大量に発行される軍事公債の大口引き受け手として得る償還利子やその窓口手数料などで大いに潤ったに違いない。「勅令第百四十四号／軍事公債条例」（明27・8・15）は、公債の発行上限額を五千万円とし、利子を一ケ年百分の六以下に定め、半年ごとの償還とした。九月半ばには応募額が六千万円以上に達したが、主な「応募者は日本銀行一千万円、第十五銀行七百万円、第百十九銀行三百五十万円、三井銀行三百五十万円」（明治27・9・15「時事新報」）など、銀行だけで総額の三分の一を超えた。その後も応募は増え続け、上限額は一億円となり、応募額を分割した（明27・10・19「時事新報」）。銀行はこの変種の戦時特需で巨額の利益をあげたはずで、「銀行の川様」もその恩恵に浴した一人ではなかろうか。また、「議員の短小（ちひ）さま」は、体格の貧弱さをあらわすが、開戦直後の軍国議会の総選挙（明27・9・1）で当選し、体格の「短小」とは逆に態度が大きく、議員の職を鼻にかけた人物〈地位様（ちいさま）〉の皮肉ともとれる。いずれにせよ、〈戦争〉で辛酸をなめる庶民の苦労をよそに、また、三国干渉（明28・5）以後の国民的合言葉「臥薪嘗胆」などどこ吹く風で濡れ手に泡の金や地位にあぐらをかき、戦時に廓で散財する「馴染」の姿に、一葉は〈戦争〉による理不尽な格差への怒りをあてこすったと思われる。

さらに、戦時の影と見られる挿話がある。それは正太が美登利に「錦絵」を見せたあと、次のように語りかける「写真」の話である。

ねへ美登利さん今度一処に写真を取らないか、我れは祭りの時の姿で、お前は透綾のあら縞で意気な形をして、水道尻の加藤でうつさう（中略）、笑はれても構はない、大きく取つて看板に出たら宜いな（中略）、変な顔にうつるとお前に嫌らはれるからとて美登利ふき出して、高笑ひの美音に御機嫌や直りし。（六）

「写真」が日清戦争の開戦とともに世間で急速に拡大・流行したツールであることは知られているが、実際「写真屋は皆ホク〳〵」の見出しで次のような新聞記事もある。

征清軍事の起りし以来、府下写真師の家は朝より夕に至る迄非常の雑沓にして、或は兵士の自ら撮影して親戚故旧の許に贈るあり、或は親戚故旧の特に従軍者を同伴して写真するあり、之れが為めに九段坂の鈴木一真、新し橋の丸木利陽、三崎町の小川一眞、浅草の江崎礼二、神田と芝の江木兄弟、木挽町の玄鹿舘を首とし、大小写真舗は皆時ならぬ利益を得るより、中には急に値上げしたる所なんどもありと云ふ。（「毎日新聞」明28・3・5）

ここには見えないが、芸妓の写真が戦地への慰問品にもなったことを思えば、美登利の写真撮影の挿話はその陰鬱な投影ともいえる。また、鷗外ゆかりの元津和野藩の当主亀井慈明が初めて写真の戦争報道を試みたのも日清戦争においてだった（明28・1・11「毎日新聞」、同1・17、18「報知新聞」）。いわば〈写真〉は日清戦争と重なる社会現象の代名詞だった。「たけくらべ」執筆中に起稿（明28・3・30）された「ゆく雲」（明28・5、「太陽」）は「折柄日清の戦争画、大勝利の袋もの」（下）として日清戦争の時局を明示する作品だが、そこにも「写真」が三度も登場する。「この頃送りこしたる写真をさへ見るに物うく」（上）や「桂次がもとへ送りおこしたる写真」（下）などの叙述は、日清戦争を機に急速に普及した「写真」が桂次の故郷の片田舎にまで及んでいたことを物語る。とすれば、美登利に「一処に写真を取らないか」という正太の申し出は、日清戦争を連想させる端的なしるしであり、戦時の流

行にも敏感な正太のませぶりをも示すものといえよう。

また、祭の趣向として正太が提案した「幻燈」（三）にも日清戦争の影がうかがえる。木股知史[注11]は幻灯機の文化誌を詳述したあと、「観幻燈記」（「小国民」明28）から「児童の戦争意識を高めるという役目」を見る唐澤富太郎の言及や平塚雷鳥の自伝『元始女性は太陽であった』などから「幻燈会の目的が、戦争意識の高揚にあった」と指摘する。ちなみに、芥川龍之介の「奇怪な再会」（「大阪毎日新聞」大19・1）にも次のような描写がある。

剣舞の次は幻燈だつた。高座に下した幕の上には、日清戦争の光景が、いろいろ映つたり消えたりした。大きな水柱を揚げながら、「定遠」の沈没する所もあつた。敵の赤児を抱いた樋口大尉が、突撃を指揮する所もあつた。大勢の客はその画の中に、たまたま日章旗が現れなぞすると、必ず盛な喝采を送つた。中には「帝国万歳」と、頓狂な声を出すものもあつた。

また、喜多村里子は地方の実例から次のように述べている。[注12]

島根県八束郡岩坂村では（中略）十一月には四夜連続で村内四つの地区ごとに日清戦争幻灯会が開かれた。とくに幻灯会は農繁期にもかかわらず会場は足の踏み場もないほどの盛況で、初めに宣戦の詔勅を捧読し、天皇・皇后の肖像が映し出されたときには小学生が君が代を斉唱し、日清韓三国の兵士の比較や戦闘場面が解説されるなど、幻灯会を通して敵愾心を喚起していた。

「幻灯会」は「敵愾心」や天皇への忠誠心を喚起し、戦意昂揚をあおるために日清戦争前後に全国各地で開かれたイベントだった。つまり、正太の語る「幻燈」は国家肝入りのプロパガンダを忠実になぞる提言だったのである。ただし、〈戦争〉の影は慎重に脱色されて。

一葉はおそらく、日清戦争のあらわな投影を抑制する一方、大巻の「馴染」や「写真」や「幻燈」などに〈戦時〉の匂いをさりげなくすべりこませたのである。戦争に「うとまし」さや「つら」さを感じ、窮乏生活をさらに圧迫する〈戦争〉に一葉が無関心だったはず

はない。とはいえ、時局柄、戦争批判や厭戦気分をあらわに描くことにも細心の注意を払わなければならない。たとえば、内務省警保局「警保局図書課」編『出版警察資料』[注13]によれば、明治二十一年より二十八年の間に安寧秩序妨害や風俗壊乱で発禁処分となった書物は合計一八三点（前者五六点、後者一二七点）で、このうち日清戦争が近づく明治二十六年から戦時の二十八年までの発禁本が八九点、約半数（前者二八点、後者六一点）を占める。なかでも、一葉が愛読した西鶴関連では『西鶴全集』（帝国文庫、博文館、明27・7）などの四種が発禁となった。これは一葉にも衝撃だったはずで、いっそう警戒心をつのらせたに違いない。戦時下の一葉日記の欠もそうした警戒心による処置だったのかもしれない。とすれば、「たけくらべ」においても慎重な配慮が必要だったろう。一見〈戦争〉とは無縁の世界と見せつつ〈戦争〉を〈裏声〉で歌うような工夫が施されたとしても不思議ではない。

五

「たけくらべ」に点描された「馴染」客や「写真」や「幻燈」が日清戦争の暗喩であることは当時の鋭敏な読者ならば容易に察知できたのではなかろうか。一葉はそれらの描出を通じて「たけくらべ」に潜むもうひとつの解読コードを示唆したのである。そして、そのコードにしたがえば、表組と横町組の子供の〈喧嘩〉がミニチュア化された〈戦争〉の暗喩であることは明白だろう。そして、現実社会の〈戦争〉を子供の〈喧嘩〉という小さな〈戦争〉に変換した物語世界では、すべてが縮小されることも。

周知のように、「たけくらべ」の子供たちを巻き込む〈喧嘩〉の要因は、地縁の論理と金銭の論理の衝突であるが、〈戦争〉とは、その二つの論理、領土（地縁）と経済（金銭）の論理を多大な犠牲をはらって強行する大きな〈喧嘩〉なのだ。

作中人物では、本人に「何の咎」もない（五）車屋の三五郎がその二つの論理に引き裂かれ、〈喧嘩〉の無惨な犠牲者となる。その姿は、余儀なくして〈戦争〉

に駆り出され、無名の下級兵士として落命する庶民の典型といえよう。長吉らに手ひどい仕打ちを受けながら、「悔しさを噛みつぶし」て父に訴えることもできない三五郎の痛み（十）は、庶民の声なき痛苦の写し絵といえる。こうした三五郎の役回りは、たとえば「車夫は軍夫に早替（はやがわり）」といった新聞記事を連想させる。

東京府下に於ける人力車夫は、近来の不景気に何れも非常の困難なりしが、日清事件に付軍夫蒐集に際し、我れ先きと争ふて此募集に応じ、為に市内に於て軍夫となりし車夫は、殆ど四万余千（ママ）人に達したりと云ふ。（明27・12・9「国民新聞」）

三五郎がもし父の貧しい車屋稼業をつぐのであれば、彼も「軍夫」として真っ先に戦地に赴いただろう。三五郎は「軍夫」に「早替」する小さな「車夫」なのだ。ちなみに〈人力車〉は「別れ霜」や「十三夜」などの一葉作品で重要な場面に登場する道具立てである。特に後者の阿関の初恋相手・録之助が廃人同様に「車夫」に身をもちくずす姿は、社会の最下層に沈みそうな他人事ならぬ身として一葉の心底に深く刻まれる暗喩だったろう。[注5] その意味で三五郎の哀れな姿は一葉自身の恐れであり哀しみでもあった。

〈喧嘩〉が小さな〈戦争〉だとしたら、父の威勢をかりた「乱暴の子供大将」であり「頭の長」（二）として暴君ぶりを発揮し、うむいわせず「大凡十四五人」（五）を引き連れて〈喧嘩〉に臨む長吉は、命令に逆らえない柔順な兵士たちを〈戦争〉に駆り出す職業軍人（上級将校）の姿に似ているかもしれない。

また、高利貸の祖母に代わって日掛けの集金に回る正太は、原理的には貸金の利子で経営される小さな〈銀行家〉といえる。あるいは、「廓内（なか）の大きい楼（うち）にも大分の貸付があるらし」い「金主様」（四）は、地域限定の小さな〈資本家〉といってもよい。正太が長吉一派の襲撃現場に遭遇しなかったのは、つまり、小さな〈戦争〉の現場に不在であったのは、物語でいえば祖母の呼び出しによる偶然の結果であるが、はたしてそれだけだろうか。

正太本人の意志は別として、「金主様」の孫である正太の不在は、庶民の苦難をよそに焼け太りのように

〈戦争〉で莫大な利益をあげる〈銀行家〉や〈資本家〉が、けっして〈戦争〉の前線には立たないことの暗示とも思える。事実、徴兵令は金の力による免役の買い取りを公認していた。(注15)

「竜華寺さまの若旦那」(七)である信如は、「腥(なまぐさ)」で「朝念仏に夕勘定」の父の大和尚を「心ぐるしく」感じ、「欲」のために「恥かしさも失せ」た母を「恥かしく」思いながらも(九)、おそらくは親の指示に従って「何がしの学林に袖の色かへ」る(十六)ことになる。彼はまた、廓からの朝帰りらしい長吉の「親切」な「世話」にあずかる反面、美登利が「格子門」に投げ出した「紅入り友禅」の「裂(き)れ」を「見ぬやうに見て知らず顔」でやりすごす(十三)。女の身体を金で買ってきたばかりの長吉の恩義にあずかる信如は、美登利の恥辱を共有することのない(見て見ぬふりをする)存在なのだ。彼が長吉に加勢を頼まれながら、正太と同様、小さな〈戦争〉の現場に不在なのは、寺院の後継者や「何がしの学林」への就学を理由に徴発を免役ないし猶予される存在だったことを物語る。たとえば、国民皆兵をめざすべき「徴兵令」にも抜け道はあり、全面改正された「徴兵令」(明22・1、法律第一号)でも「文部大臣ニ於テ中学校ノ学科程度ト同等以上ト認メタル学校(第11条)ニ在校ノ者ハ本人ノ願ニ由リ満二十六歳迄徴集ヲ猶予ス」(第21条)の条文や「徴集に応スルトキハ其家族自活シ能ハサルノ確証アル者ハ本人ノ願ニ由リ徴集ヲ延期ス」(第20条)や「余人ヲ以テ代フ可カラサル職務ヲ奉スル」者は「招集スルコトナシ」(第22条)との条文がある。(注16)寺の跡取りにして「何がしの学林」に転校(進学)する信如は、小学校卒の「中間」がすべて「満十七歳」になると現役の徴兵義務を負うのと違って、先の条文に準拠するか拡大解釈によって免役や猶予となる可能性が高い。たとえば、次のような記事(明28・2・27「毎日新聞」)もある。

僧侶にして予備後備徴発の爲め征清軍へ従軍せるものゝ内、教師以上の資格あるものは、本山の添書若しくは照会により、軍服を脱し袈裟法衣を着し従軍僧となり、忠勇なる戦没者若しくは病死者

を埋葬弔祭することを許可せらるゝ事となりたるよし。

信如が、有力な檀家をもつ地域共同体の要である寺院の後継者である以上、「本山の添書若しくは照会」を得るのは容易だったはずで、とすれば「軍服を脱し」て「従軍僧」となり、戦地の前線を避けることも可能だった。小さな〈戦争〉の現場における信如の不在は、そうした彼の特別な境遇を暗示している。ちなみに「徴兵令」の「質議回答」には「真宗京都中学本科卒業後同実修科ニ在学ノ者徴集猶予」といった例も見られる。(注17)

最終章（十六）で、不機嫌な正太の「荒らい」様子に接した三五郎は「何だ、喧嘩か」と勢い込む。それを否定された三五郎は「今夜はじまらなければ、最う是れから喧嘩は起りッこ無いね」と語り、長吉の「片腕」である信如の「坊さん学校」への転校を告げる。長吉の廓体験と美登利の初潮と信如の転校と、この三幅対によって子供たちの小さな〈戦争〉は終わりを告げる。ところで、上述の場面で正太が「藤本は来年学校を卒業してから行くのだと聞いたが、何うして其様に早くなつたらう」と不思議がる理由は何か。淡い恋物語を軸とすれば、信如が美登利の初見世が近いことを知って悲嘆し、一刻も早く不浄の地を離れたかったからだ、とでも解釈できる。しかし、この転校が信如自身の意志ではなく、大和尚の勧めだとしたら、わずか半年余りの繰り上げもやはり徴兵問題のからむ処置と考えられる。数え十五歳の信如は、三年後には兵役義務の生ずる「満十七歳」となる。「経済」の「割出し」にさとく「さばけた」気性で世知にもたけた大和尚は、先を見越して信如の〈徴兵逃れ〉を考え、竜華寺の後継には自然な方策として「坊さん学校」への転校を急がせたのであろう。信如と美登利を除く大音寺前の少年たちにとって、小さな〈戦争〉の終わりは、やがて迫りくる大きな〈戦争〉の始まりであった。

六

ところで、一葉と縁のあった穴沢清次郎に次の回想(注18)がある。

日清戦争の頃なので、私は「戦争と文学」と云

つた風な質問をしたことがありました。その時に一葉さんは、

「われ〳〵仲間では少しも戦争なんて影響されませんね」

と答へました。戦争熱に浮かされてゐた私は、そんなものかなあと思ひながら、毅然とした態度を思はず眺めたものです。

こうした回想を信じるなら「たけくらべ」を「戦争小説」と読む拙稿はきわめて突飛な妄説ということになる。しかし、同文中には一葉を「大変皮肉な人で」「虐げられた女性の味方」だと述べる一節もある。自分のもとに古典を教わりにくる素朴な十七歳の若者に向かって一葉が率直な本音をあらわに語るとも思えない。「少しも戦争なんて影響されません」との断言は、「戦争」への無関心そのものを示すとは限らないし、むしろ「戦争熱に浮かされてゐ」る世間への皮肉であり、戦争の本質を見ようとしない社会への痛烈な批判だったと解することもできる。事実、彼女は他の作品において結婚制度における男女の身体性（「十三夜」）や冷徹な近代経済の合理性（「大つごもり」）や社会の底辺でもがく女性の精神性を問いかけ（「にごりえ」）、その社会性に鋭く迫っている。[注19] すでに見たように、記事の分量こそ少ないものの日記類では日清戦争への注視を怠らず、歌の詞書きでも「うとましきはたゝかひ也」と明記している。自作のモチーフをみずから吐露することのなかった一葉の真意は、作品世界を生きる登場人物自身の中から汲み出すしかないだろう。「たけくらべ」の場合、その真意は主人公美登利の身体に最も深く刻みこまれている。

正太や信如とちがい、三五郎とともに犠牲となった美登利は、正太に対する長吉の反感から生じた小さな〈戦争〉に巻き込まれ、屈辱的な仕打ちをうける。長吉は横町組の〈地縁〉の論理によって正太の〈金銭〉の論理に一撃を加えようとするが、「敵（かたき）の正太」（五）が不在だったため三五郎を打擲（ちょうちゃく）し、止めに入った美登利を攻撃する。長吉が美登利を攻撃するのは、内実こそ違え、美登利もまた廓を支配する金銭の論理で「子供中間の女王さま」（三）だったからである。「何を女

郎め、頬桁たゝく、姉の跡つぎの乞食め」（五）と罵倒しながら美登利を蹂躙する長吉の暴力は、兵士たちを率いる軍人が戦地や慰安所で女性の身体を暴力や金で犯す姿の暗喩といえよう。小森氏が述べるように「軍隊と売春制度」をセットにして構築する「近代国民軍」の要諦が国家管理の売春制度である吉原遊郭に具現化されているとすれば、「戦争とレイプや売買春」の「密接不可分」な事態は、長吉が美登利に加えた「洗ふても消えがたき恥辱」（七）と廓からの「誇らし気」な朝帰り（十三）に二重に投影されている。加えて、遊郭の女たちが借金の早期返済を名目に高給の支払われる戦地の「慰安所」に送りこまれた事実を思い合わせれば、美登利のうけた「恥辱」はさらに暗鬱な未来の先取りだったことになる。

初潮を迎え、女性の身体を商品として売買する悪場所にからめとられる美登利は、前田氏や小森氏の語るようにたしかに「近代」の「格差」を増幅する金銭の論理の「いけにえ」だった。しかし、それ以前に、子供の〈喧嘩〉で暴力の犠牲となった美登利は、明治国家が推進する「富国」と「強兵」のもと、前者の犠牲であるとともに、後者のもたらす〈戦争〉の犠牲者でもあったといえる。たとえるなら美登利は二度殺されたのである。一度目は長吉からの暴力的な「恥辱」すなわち〈戦争〉によって、二度目は〈金銭〉に縛られる廓にとりこまれることによって。

〈戦争〉を凝視した一葉は、同性の女たちの銃後の苦悩や哀しみに注目する。戦地で死傷する危険はないにしても、ファロセントリックな男性原理の発現である〈戦争〉の熱狂が最も虐待するのは、戦力にならぬ女性の身体と「かひなき女子」の「思ひたつ」心だからである。〈戦争〉の残酷さは、兵士同士の殺戮にだけあるのではなく、女性の身体と精神を蝕む二重の疎外にも凝集される。一葉が美登利に与えた二度の死は、暴力と金銭による女性の恥辱、その「女なりける」姿を物語ることが、何よりも〈戦争〉の論理を相対化し、〈戦争〉の隠された残酷さを顕在化する方法だったからである。

「たけくらべ」は、「吉原」という〈人外〉の艶（あで）やか

さと〈子供の世界〉という他愛の無さを隠蓑としつつ、その内部に子供の喧嘩（小さな戦争）に圧縮された大きな〈戦争〉を隠しもつ物語である。廓に寄生する「大音寺前」の子供たちは、「近代」に抑圧されたいたいけな「子ども」であるよりは、大きな〈戦争〉の縮図である〈子供の喧嘩〉に巻き込まれた〈小さな大人〉たちなのだ。[注20]「喧嘩」という小さな〈戦争〉に加担させられた「子ども」たちは、物語の表層から大きな〈戦争〉の影を消去するための〈擬態〉が生み出した仮象にほかならない。「子供中間の女王さま」だった美登利が「泥草鞋」の「恥辱」を刻印され、身体を売る「女郎」へと暗転する残酷なドラマは、人間の犯す最も愚かな行為であり、男性原理による近代資本主義の促す富国強兵策がゆきつくカタストロフィの〈戦争〉を、その最大の犠牲者である女性の身体と精神の蹂躙によって浮き彫りにした物語なのだ。丸谷才一[注21]にならえば「たけくらべ」は〈裏声で歌われた戦争小説〉だったのである。

【注】ほか

（付記1）末尾の「水仙の造り花」について一つ思いつきを加えておく。

生花の「水仙」は周知のとおり「霜月」の季語だが、[注22]作中の「水仙」の出処として、相愛の男女を「水仙」と「柳」にたとえる長唄「越後獅子」[注23]の詞章は考えられないか。

す〔好〕いた水仙、すかれた柳の、ほいの、心石〔せき〕竹、気はや紅葉サ、やつとかけの、ほい、まつかとな

関良一が四章の「打つや鼓のしらべ」を「越後獅子」のパロディとしながら、この一節に触れないのは不思議だが、「すいた水仙」を美登利、「すかれた柳」を信如に見立てれば、「見返り柳」に始まる「一」が信如の紹介で結ばれ、最終章が美登利に捧げられた「水仙の造り花」で結ばれるのと対応する。また「紅入り友禅」の模様が「紅葉」であるのも詞章の「紅葉」と対応し、末尾の「まつか」が「真っ赤」ならばこれも「紅入り」友禅と対応する。「たけくらべ」が吉原界隈という設定との関連から「音曲、特に俗曲の詞章・情調が十分に活かされている作」[注24]であるなら、一葉の耳になじんだ長唄の一節に想を得たとしても不思議ではない。また、『蕪村句集』（一七八四）の「冬」に「水仙や美人かうべをいたむらし」の句があり、「水仙」を頭痛に悩む美人の姿に見立てているが、この趣向と初潮で伏せる美登利の姿が通底するようにも思える。偏頭痛が一葉の持病であったことを思えば、この句も捨てがたい。問題

は水仙が「造り花」であることだが、目下これといって成案といえるほどのものはない。後考をまちたい。

（注1）初出「展望」（昭50・6）『樋口一葉の世界』（昭53・12、平凡社）所収。

（注2）小森陽一『ことばの力　平和の力――近代日本文学と日本国憲法』（かもがわ出版、平18・10）参照。氏には別に「口惜しさと恥しさ――『たけくらべ』における制度と言説――」（『文体としての物語』昭63・4、筑摩書房）もあるが、ここでは〈戦争〉を軸とする観点から前者をとりあげた。

（注3）「『たけくらべ』ノート」『たけくらべ研究』（教育出版センター、昭47・11）。

（注4）『樋口一葉集　日本近代文学大系』（角川書店、昭45・9）「補注」。

（注5）加藤恭彦「明治二十七年という空間」（『論輯　28』平12・5、駒沢大学大学院国文学会）は、事実は「千束神社」大祭が八月二十一日、「三の酉」が十一月二十七日とし、そのズレや背景を述べているが、日清戦争への言及はない。

（注6）日記や詠草の引用は『樋口一葉全集』第三巻（上）および第四巻（上）（筑摩書房、昭51・12、昭56・12）による。

（注7）前出（前出注6）全集・第三巻（上）の野口氏（補注）。

（注8）前出（前出注6）全集・第四巻（上）の野口氏（補注）。

（注9）この歌については小森氏（注2）も簡略に言及している。

（注10）和田氏（前出注4）は「兜町の米様」を花柳界の習慣で姓の一字を呼び名とする類いとし、菅聡子「補注」（『新日本古典文学大系明治篇　24　樋口一葉集』岩波書店、平13・10）も同様だが、それでは「短小さま」の呼称が解けない。私見は戦時に大金を払って遊ぶ人種にあてこする命名だと考える。「米様」には、第五国立銀行の設立者で東京米穀取引所を創設し、米穀株式界で辣腕を奮い、「洗髪のお妻」の身請けで話題となった「米倉一平大盡」（明28・6・30「都新聞」）の投影を想定している。

（注11）「写し絵・幻燈・茶番」（「宇部国文研究」昭60・3）。

（注12）早川紀代編『軍国の女たち』（吉川弘文館、平17・1）第1章。原資料は『八雲村誌』（平8・12、八雲村誌編集部）による。

（注13）『明治21～昭和9　禁止単行本目録』（湖北社、昭51・7）。

（注14）「別れ霜」の人力車については山田有策「迷走する人力車」（『深層の近代――鏡花と一葉』おうふう、平13・1）に言及がある。

（注15）菊池邦作『徴兵忌避の研究』（立風書房、昭52・6）第二章第二節には「代人料」を上納すれば兵役免除となるなど、合法的徴兵忌避の例が挙げられている。

（注16）『官報』（一六六七号、明22・1・22）。

（注17）「真宗」云々は時代がやや下って「徴兵令徴兵事務條例及同條例施行細則」（明39・8・30）に見える例（『陸軍成規類聚（一）』緑蔭書房、平23・1）である。

（注18）穴澤清次郎「一葉さん」（筑摩書房版『一葉全集』月報第二号、昭28・9）

（注19）「十三夜」については拙稿「原田勇の鬱積――『十三夜』

の身体――」（「近畿大学日本語・日本文学」8号、平18・3）で、「大つごもり」については「『大つごもり』試論――近代〈経済学〉の誕生――」（「近畿大学日本語・日本文学」15号、平25・3）で、それぞれ論じている。

（注20）小森氏は（前出注2）の後者の論で前田論の「かつて子どもであった私たちの原像」といった「無垢なる子どもといった幻想」を前提とする危うさを指摘する。

（注21）丸谷才一『裏声で歌へ君が代』（新潮社、昭57・8）。

（注22）正保二年（一六四五）頃の刊行で、広く流布した松江重頼編の俳諧作法書『毛吹草』（岩波文庫、昭18・12）「巻第二　誹諧四季之詞」も水仙を霜月の季語とする。

（注23）「越後獅子」は作詞篠田金次・作曲九世杵屋六左衛門、七変化「遅桜手爾葉七字」の一齣として演じられる。『名作歌舞伎全集　24　舞踏劇集　二』（昭47・6、東京創元社）および『京舞井上流歌集』（昭40・3、祇園八坂女紅場学園）を参照。

（注24）「『たけくらべ』の世界」『樋口一葉　考証と試論』（昭45・12、有精堂）所収。

（注25）関良一「『たけくらべ』の趣向」（前出注24）同書所収。

（付記2）本文（筑摩版全集）および新聞等の引用はすべて新字に改めた。